

令和 3 年 5 月 10 日現在

機関番号：37405

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2020

課題番号：18H05779・19K20971

研究課題名（和文）生徒指導の話し合いをめぐる教師間相互行為研究

研究課題名（英文）Interaction between teachers about student guidance

研究代表者

原田 拓馬（Harada, Takuma）

活水女子大学・国際文化学部・講師

研究者番号：80825125

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、生徒指導をめぐる教師同士の話し合いという相互行為の過程で編み出される言語実践に注目し、質的調査を実施した。調査データの分析により、教師同士は同僚教師との間でいわゆるジャーゴン（仲間だけに通じる特殊な言葉）をつくりだし、ローカルな局域のみで通用する秘匿化された言語実践を通して生徒の問題を再構成し、理解しようとしていることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の生徒指導論は「いじめの解決」「不登校からの復帰」といった目標を規範的に定めて教師による生徒指導の技術・方法の有効性を検討し、他方で教師による生徒指導の技術・方法の正当性や抑圧性を論じるものが多数を占めてきた。それに対して本研究が事例研究から得られた知見として生徒指導の学校組織的な企図及びその実践の構造的側面を実態に基づいて指摘する点は、生徒指導の組織的対応が求められる昨今、特に有用な視座を提示できたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the interaction between teachers about student guidance. This study revealed that teachers use jargon to understand the problem students face.

研究分野：教育学

キーワード：生徒指導 教師間相互行為

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

従来の生徒指導論では「いじめの解決」「不登校からの復帰」という目標を規範的に定めて教師による生徒指導の技術・方法の有効性を検討し、あるいは教師による生徒指導の技術・方法の正当性や抑圧性を論じるものが多数を占めてきたといえる。他方で教師の生徒指導の実践に計画・方針を与える教師間での話し合いも、教育学諸領域で研究の先鞭が付けられ始めていた一方で、そのほとんどが職員会議などフォーマルな場での話し合いに焦点を当てるものであったといえる。しかし、学校現場の実態に即して予備的な観察調査を実施すると、教師同士の立ち話やインフォーマルな会話場面で生徒指導の計画・方針が話し合われ、その重要度は大きいと考えられる。

教師同士の話し合いの局面に議論を閉じず、そこで作り出された計画・方針のもとに生徒指導がいかなる実践として組織されるのかを明らかにする必要があると考え、本研究の構想に至った。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、教師同士で人間関係上のトラブルを抱える生徒の生徒指導について話し合いを行うとき、その話し合いの場において教師間でどのようなワークが協働的に組織され、それが生徒指導の計画・方針に対していかなる影響を及ぼすのかを学校現場での質的調査に基づいて解明することである。

### 3. 研究の方法

本研究では、人間関係上のトラブルを抱える生徒への指導の事例として、生徒がグループ間移動を断続的に繰り返す際の教師による対応のケースを検討することとした。この事例をめぐる教師間で構成される認識形成のプロセスに注目し、教師を対象としたインタビュー調査を通じて収集したデータを分析するという方針を立てた。調査は同一の調査対象者に複数回実施し、認識形成のプロセスを細部に渡って記述する方針を取った。具体的には、生徒への問題認識方法、教師同士の話し合いの状況や内容、実際の指導場面について、教師の認識を基点として時系列的に事例を再構成する方法を採用し、記述の精度を高めることにした。具体的には、高校教員を対象としたインタビュー調査を実施し、女子生徒のグループ間移動に関するデータを収集・分析することにした。

### 4. 研究成果

研究目的に即して、研究初年度に当たる2018年度には、生徒指導論及び青少年研究を中心に先行研究・実践資料を渉猟して研究課題及び研究方法を改めて整理し、さらに教師を対象としてインタビュー調査を継続的に実施した。当初最終年度予定としていた2年目、2019年度には、インタビュー調査で収集したデータを分析し、日本子ども社会学会第26回大会で研究成果を報告した上で、論文執筆を開始した。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、調査協力者との分析結果の確認作業や研究論文のブラッシュアップの機会を失い、2020年度にも事業期間を延長した。3年目に当たる2021年度にも、引き続き新型コロナウイルス感染症の影響で特に調査協力者との分析結果の確認作業の場を設定することに難航したが、時期を見て実施することができた。また、研究論文のブラッシュアップを行うための研究会も開催でき、論文執筆を進めることができた。

研究の具体的な成果として、教師間での話し合い過程(相互行為過程)で生じている特徴的な言語実践に注目することができ、教師は同僚教師との間でいわゆるジャーゴン(仲間だけに通じる特殊な言葉)を編み出し、秘匿化された言語実践を通して、生徒の置かれた状況を問題化すると同時に、理解しようとしていることが明らかとなった。このジャーゴンの存在への指摘は、これまで教師間相互行為の中に閉じられた技法の存在をも示唆するもので、そこに生徒指導論が踏み込むべき新たな研究調査のフィールドがあるという論点を与えてくれたといえる。

本研究の成果のインパクトとして、従来の生徒指導論において生徒指導の技術・方法の有効性ないし正当性・抑圧性が論じられてきた一方で、本研究では教師間相互行為という視点を組み入れることによって、生徒指導を教育実践としてだけでなく、組織論として分析する視座を新たに提示できたと考えられる。これにより確認できるのは、教育実践の背景に教師間相互行為を見据えて教育学諸領域からアプローチすることの意義であり、今後さらに研究が進められる必要があるといえる。

本研究の過程で導き出した新たな展開方針として、「見守る」タイプの非介入・非接触を特徴とする生徒指導、いわば「傍観的生徒指導」の実践を研究対象とする見立てを得ることができた。というのも「生徒指導の話し合いをめぐる教師間相互行為」を研究する中で、教師同士の話し合いの結果として「見守る」「様子見」が実践されることも多く確認されていたためである。本研究課題の後継研究として、「傍観的生徒指導」の実践に焦点を当てて、さらに教師間相互行為との関連構造を見出すことが必要という着想を得るに至り、発展させていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 原田拓馬	4. 巻 第62集
2. 論文標題 国語のアクティブラーニング型授業における「問い」の位相	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 活水論文集文学部編	6. 最初と最後の頁 17-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田拓馬	4. 巻 第64集
2. 論文標題 高大連携に基づく「総合的な探究の時間」の支援体制の整備に向けて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 活水論文集	6. 最初と最後の頁 41-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 原田拓馬
2. 発表標題 ローカル・メタファーを用いた生徒指導対象者の発見 = 認識過程
3. 学会等名 日本子ども社会学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------